

Apocalypse fantástico

空港方面を示す道路標識に、飛行機の図が描かれていた。それは不思議なことに空飛ぶ鯖に似ていた。役所の測量技師が描いたのだろうと私は想像した。かわいそうな男が、サンドイッチの紙袋の上に、印刷所へ送る最終版のレイアウトを走り書きしたのだ。あるいはその哀れな男は、よその国の標識から写したのかもしれない。いや、もっとありそうなのは、飛行機が好き勝手に飛び、好き勝手に海へ沈むことのできる、よその惑星の標識から写したのだ。

私の隣には年老いたウクライナ人の女、少女がふたり、狼男、そしてエジプト人の一家がいた。みな去っていくところだった。遠くへ。たぶんハリケーンに会いに。

六十年代に建てられた醜い家々の前を通らねばならなかった。建築家が惑星規模の免責を享受し、全能であった時代。イタリアが空白だらけで、誰もそれをどう埋めればよいか知らなかった時代——無さえ滅ぼせばよかったのだ。「草よりは醜いほうがまし」と彼らは考えた。誰もが神に、自然の外側の隠れ場所を開いてくれと願っていた時代。

人は美しい糞よりも、醜い作りものにこそ心を奪われる。

無秩序な自然は、無菌の醜さよりもわれわれを怯えさせる。だからわれわれは、自分を安心させるために醜いものを建てる。

自然の不死性、いつでも、いつまでもそこにあること、木の根でアスファルトを食べていくこと、宇宙を養う破壊と生成の力——それらはわれわれを落ち着かなくさせる。だがそれは、自分がこの地上の乗客にすぎないと感じることの落ち着かなさであり、遅かれ早かれ自然がわれわれを自らのうちに引き取るのだという自覚である……

[続きはPDFに、全13ページ]

Luca Motolese · Lisbona 2016

motolese.com — 原文はイタリア語